

試合における間合いをどのように語るのか

～本学硬式野球部員を対象として～

東郷 真明 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)

指導教員 豊田 則成

キーワード：生じた間合い 整備 有効さの認知 無能さの認知

1. 緒言

本研究は、「野球選手は試合における間合いをどのように捉えているのか」といったリサーチクエスチョン(Research Question: 以下 RQ と称す)の下,質的なアプローチを行い,そこから発展継承可能な有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

2. 方法

著者がビデオ編集を行った 5 試合に出場していた本学硬式野球部員 12 名を情報提供者 (Informant, 以下: Inf.)として対象にし,スコアブックを参照しながら,質的研究法の代表的な手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach)を用いて行った。

3. 結果と考察

選手の語りから,概念図(下記 Fig.1 を参照)

を生成し,「野球選手は試合における間合いをどのように捉えているのか」といった RQ に対し,「生じた間合いの中で,チームの意志を統一しようとする努力から雰囲気を活活化させ,ポジティブな位置づけをはかっていく.一方,雰囲気が沈滞し続ければ,ネガティブな位置づけになってしまい,間合いの無能さを認知するに至るといったプロセスとして捉えている」という仮説的知見を導きだした。

4. まとめ

- ① 間合いを,過剰な意識をせず,ネガティブなイメージとして捉えない。
- ② チーム内で積極的にコミュニケーションをとり,意志統一を図る。
- ③ 間合いをとることで,相手にプレイ選択を迷わせるといった戦術に用いることができる。

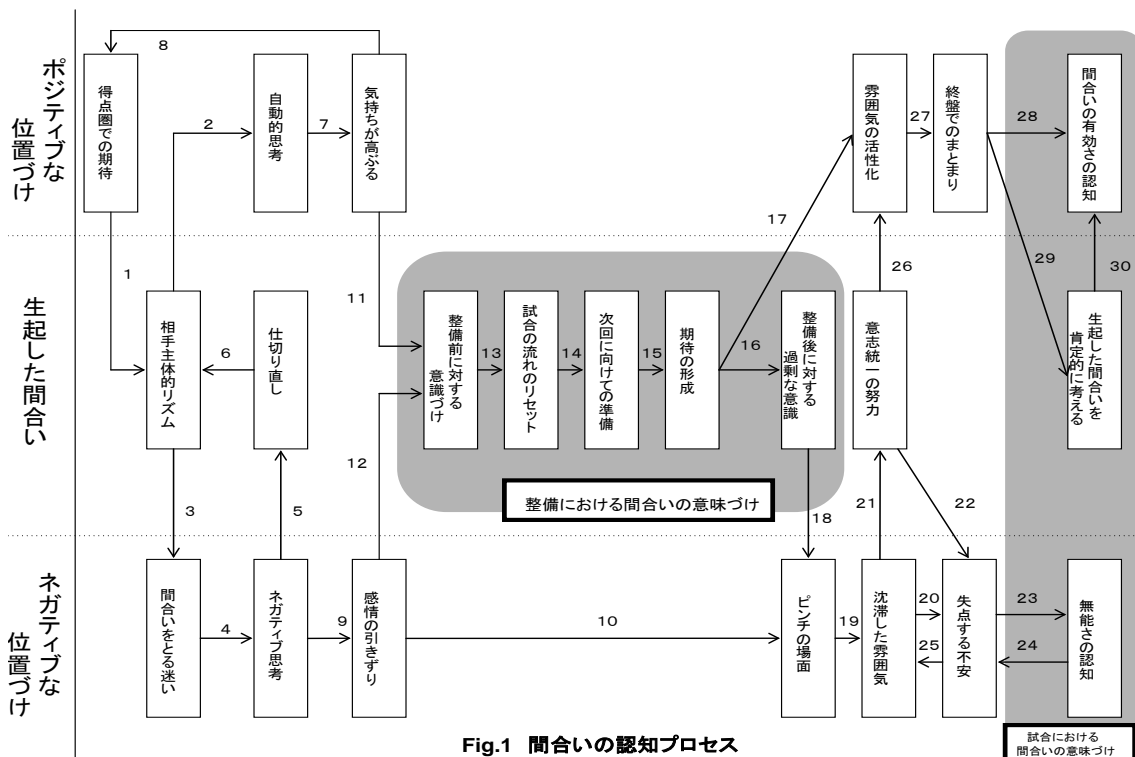


Fig.1 間合いの認知プロセス